

演題

当協会発足の経緯から現在までの考察

氏名 糸瀬 正通

抄録

1983年米国審美歯科学会（AAED）がハワイ、マウイ島にて開催され、河原英雄先生が講演された。

河原先生の講演の口腔内写真、X線写真がすべて規格的で素晴らしかったので、講演後、カメラの機種やフィルム、撮影方法など多くの先生方から質問があった事を今でも鮮明に覚えている。

その帰りの飛行機の中で、河原先生が日本でもAAEDに負けないような学会を作ろうと云う提案をされ、帰国後早速その準備に取り掛かった。

そのうち学会は大学関係者が作ると思われていたので、我々は協会にすることにした。

名称は、日本審美歯科協会（JAPANESE SOCIETY OF AESTHETIC DENTISTRY=J.S.A.D）とし日常臨床において口腔全般にわたる機能回復と審美の追求、会員相互の融和を計り、

歯科医学の研鑽と歯科医術の向上に努める事を目的に設立された。

発足当時、チャーターメンバー38名でスタートし、お亡くなりになられた先生、仕事を辞められて退会された先生も増えているが、

現在247名（日本192名、韓国21名、台湾34名）となった。

40周年を迎えるにあたり、会員全員が入会当時の事を振り返り、協会の発展に寄与して欲しいと考える。

略歴

1970年 神奈川歯科大学卒業 同大学附属病院保存科勤務

1972年 糸瀬歯科院勤務（長崎県対馬市）

1973年 糸瀬歯科医院 開業（福岡市）

所属

日本審美歯科協会 会員

近未来オステオインプラント学会 会員

演題

日本審美歯科協会に入会できたお陰で

氏名 元 永三

抄録

1990年に糸瀬正通先生が「日本審美歯科協会に入りなさい」と言われたので、「はい」と返事はしましたが、とても入会出来る自信はありませんでした。なぜなら、その当時は入会のための症例審査と発表がとても厳しく非常に狭き門でありました。糸瀬正通先生が河原昌二先生、脇本貢先生、上田珠子先生を私と張在光先生、佐藤敬一郎先生、林田勇歩先生を審美歯科協会入会出来るように集めてくれました。1年間毎月1回集まって症例を見て貰う機会を得ました。指導医として河原英雄先生、下川公一先生、糸瀬正通先生、清野尚先生、増田純一先生が来られ毎回「ぐうの音」も出ないくらいに叱責されたことを今でも思い出します。その甲斐あって、1年後に無事入会することが出来ました。入会后、毎回一番痛烈に叱責された下川公一先生から「よう頑張った。一番良かったぞ」と言って頂いた言葉が今でも私の心に残っています。それから四半世紀、今の私の歯科医としての礎となっています。この大変だけど素晴らしい経験をする事が、これからの先生の学びの一助となればと思いつたない話をさせて頂きます。

略歴

1982年韓国慶北大学校歯科大学歯医学科卒業

1982年九州大学歯学部第1補綴学教室入局も追加で

1987年福岡市にて開業

2002年九州大学歯学部臨床教授

所属

WBC (won's Basic course)主宰

BDPG(Basic Dental Practice Group)主宰

JPGC(Just Post Graduate Course)主宰

演題

永続性のある機能美を目指して！！

氏名 吉村 理恵

抄録

審美歯科協会に入会させて頂き 20 年が経過した。当時、私にとって『審美歯科協会』とは、雲の上の存在で、先輩方のご指導を仰ぎながら、入会に向けて 1 年間必死で準備したのを懐かしく思い出される。当時は、入会条件が 40 歳以下であったのも無視して（以後 50 歳以下に変更された。）、女性歯科医師もまだ 1 名しか入会されておらず、その年に私を含む 5 名の女性歯科医師が入会を許可された。

最初は、「1 本の歯をきちんと治すこと、できるだけ歯を残すこと」に取り組み、それから、一口腔単位へとステップアップしていった。一口腔単位となると、咬合や神経筋機構との調和が必要となり、それがさらに全身の健康へと繋がってくることを学んだ。

「よく噛めて、綺麗で、長持ち」するためにはどのような配慮が必要なのかを自分の症例を振り返りながら考えてみたい。

略歴

1983 年 福岡歯科大学卒業

1987 年 太宰府市にて開業

2012 年 歯学博士学位取得

所属

日本歯周病学会専門医

日本臨床歯周病学会 歯周病専門医 歯周インプラント認定医

スタディグループ W.D.C 会長

近未来オステオインプラント学会、インプラント指導医

日本顎咬合学会認定医